



長谷川等伯(信春) 十六羅漢図
(霊泉寺蔵・石川県指定文化財)



久隅守景 四季耕作図 左隻(部分) 重要文化財

■長谷川等伯と久隅守景

第2展示室

■春の優品選—絵画を中心に—

前田育徳会尊經閣文庫分館

- 第69回 現代美術展
- 企画展Topics 国宝 薬師寺展
- 平成25年度開催の当館展覧会
- 平成24年度のコレクション展示室を振り返って
- 講演会記録 「須田国太郎の作風解釈」
- 展覧会回顧 村田省蔵展
- 美術館バスツアー予告
- 所蔵品紹介

長谷川等伯と 久隅守景

3月28日(木)～4月16日(火) 会期中無休

長谷川等伯と久隅守景、この両者に直接の接点があったのでしょうか。守景の生没年が未だ判明していないのは残念なところですが、江戸時代の元禄年間頃にかんがりの高齢で世を去ったと考えられる守景は、一六一〇年に没した等伯の最晩年には生まれてきた可能性が高いということが出来ます。そして、守景は狩野探幽門下の画人として等伯の作品を実見していたことは確かでしょう。しかし何よりも等伯と守景を結ぶのは、能登と加賀という石川の風土です。

等伯は七尾に生まれ、大陸や都からの程よい距離感から醸成された文化風土の中で自己の画業を磨き、やがて京都に上って狩野派を脅かす勢いで画壇の頂点に登り詰めました。一方守景は、探幽門下の傑出した画家としてその力量を高く評価されながらも、身内の不始末からか狩野派とは距離を置き、や

な目的を果たしただけでなく、絵師にとつては絵画制作の見本ともなっていたことがうかがえます。

「鷹狩図絵巻」 六代梅田九栄筆
支配者の狩猟活動は権威の象徴的な意味を持つものです。鷹狩は古くから行われ、江戸時代には徳川家康をはじめ代々の徳川将軍が鷹狩を好んだことともあって、武家社会における鷹狩の重要性を物語るものとなり、前田家においても重要な行事であったことは言うまでもありません。加賀藩の御用を務めた六代梅田九栄が描いたこの絵巻は、鷹狩の光景を四季おりおりの風情を織り交ぜながら極彩色で流麗に描かれています。春と夏の巻を展示します。

他に、「黒塗村梨子地桜寿帯鳥文蒔絵靴・鏡」や「桜樹幔幕文蒔絵広蓋」等の工芸品を展示します。

がて文化政策で幕府に挑んだ加賀の地で画業を開花させました。このように、石川の風土から等伯と守景が結び付き、それは室町時代末から桃山時代を経て江戸時代前期に至る絵画の展開を、狩野派との確執から眺めてみるという興味深い視点ともなりま

す。

今回は、等伯が信春と名のり能登で制作した「日蓮聖人像」(実相寺蔵・七尾市指定文化財)と「十六羅漢図」(霊泉寺蔵・石川県指定文化財)に、守景の「四季耕作図」を重要文化財、石川県指定文化財(以上当館蔵)、重要美術品(個人蔵)と三作を一挙に並べて展示し、伝統と創造という課題に果敢に挑戦した両画家の軌跡をたどります。



長谷川等伯(信春)「日蓮聖人像」
(実相寺蔵・七尾市指定文化財)

春の優品選 — 絵画を中心に —

3月28日(木)～4月16日(火) 会期中無休

日本の春は「桜」といっても過言ではありません。春を感じていただける作品を中心に展示いたしますので、兼六園のお花見とともにお楽しみください。主要作品を紹介します。

「鳥画帖」

十八世紀半ば以降、博物学好きの大名の間では、緻密な写生図による図譜がまとめられるようになりました。ことに鳥に対する関心が高まり、鳥を籠の中で飼育し飼いならす「飼鳥」が流行し、珍鳥をはじめ鳥類の写生図は大名たちの興味を満たすものとして重宝されました。この「鳥画帖」には鶴・雁・鴨など鳥類の様々な姿が三帖に七十七図描かれています(展示は第一帖のみ)。精緻に描かれた鳥類とともに、木々や草花・流水などが描かれ、博物学的

な目的を果たしただけでなく、絵師にとつては絵画制作の見本ともなっていたことがうかがえます。

「鷹狩図絵巻」 六代梅田九栄筆
支配者の狩猟活動は権威の象徴的な意味を持つものです。鷹狩は古くから行われ、江戸時代には徳川家康をはじめ代々の徳川将軍が鷹狩を好んだことともあって、武家社会における鷹狩の重要性を物語るものとなり、前田家においても重要な行事であったことは言うまでもありません。加賀藩の御用を務めた六代梅田九栄が描いたこの絵巻は、鷹狩の光景を四季おりおりの風情を織り交ぜながら極彩色で流麗に描かれています。春と夏の巻を展示します。

他に、「黒塗村梨子地桜寿帯鳥文蒔絵靴・鏡」や「桜樹幔幕文蒔絵広蓋」等の工芸品を展示します。

六代梅田九栄筆「鷹狩図絵巻(春の巻)」

薬師寺東塔大修理協力・北國新聞創刊120周年記念・
石川県立美術館開館30周年記念

国宝 薬師寺展

会期：平成25年4月26日(金)～6月23日(日) 会期中無休

今回の「国宝 薬師寺展」には、「吉祥天女像」「慈恩大師像」など絵画十二点、「聖観世音菩薩立像」など彫刻二十点、書跡五点、考古七点が出品されます。そのうち国宝が六件、重要文化財が五件という内訳になっています。

国宝「吉祥天女像」は、麻布に描かれた縦五十三センチ、横三十二センチという小さな絵画です。しかし、透き通るような天衣や風になびく着衣の表現は、天女の艶めくような美しさを強調しており、赤・紫・緑など、少ない色数にもかかわらず、美しい文様によって多彩な画面を創りだしています。束ねられた髪を飾る美しい花かんざし、わずかに残る金彩が当初の華やかさを伝えており、まるで美人画を見るかのようです。

三日月形の眉、切れ長の目、ふっくらとした頬、朱色の引きしまった口元など、その顔立ちは正倉院の「鳥毛立女図屏風」の女性を彷彿とさせるもので、当時の美人の代表とも考えられます。

吉祥天は功德天とも訳され、インド古来、ヴィシヌ神の妃ラクシュミーとして知られています。仏教には、福德をつかさどる女神として取り入れられ、特に『金光明最勝王経』中にその功德が述べられています。日本では、奈良時代から尊崇されてきており、聖武天皇の時代には、吉祥天像をかかげて国家の平安や五穀豊穡を祈る吉祥悔過がさかに行われました。この像も、薬師寺の八幡宮で行われた、吉祥悔過の本尊であったと考えられます。



国宝 吉祥天女像 ©飛鳥園

第69回 現代美術展

3月30日(土)～4月16日(火) 会期中無休

昭和二十年十月に第一回展を開催して以来、毎年行われています。現代美術展は、今年六十九回を迎えます。本展では所属会派を超えて、日本画、洋画、彫刻、工芸、書、写真の六部門から、文化勲章受賞者、日本芸術院会員、人間国宝をはじめとする財団法人石川県美術文化協会役員・会員の秀作に加え、一般公募からの入賞・入選の意欲作が一堂に展示されます。

◆部門 洋画(第7・8・9展示室)

彫刻(第4展示室)

工芸(第3・5・6展示室)

金沢21世紀美術館では日本画・書・写真が展示されます。

◆入場料(金沢21世紀美術館と共用)

	一般	大高生	中小生
当日	一、〇〇〇円	六〇〇円	五〇〇円
前売り	九〇〇円	五〇〇円	四〇〇円
団体	八〇〇円	四〇〇円	三〇〇円

◆作品解説 会期中、作品解説を行います。

◆開館時間 午前九時三十分～午後六時

毎週金曜・土曜日は午後八時まで開館

※当館友の会会員は、会員証提示により団体料金

平成25年度 当館の展覧会をお楽しみください

昭和五十八年の開館より数えて、今年三十年の記念の年を迎えました。この間、九十七の企画展を開催し、多数の皆様のご来場をいただきました。開館三十周年記念として、平成二十五年度は三つの企画展を計画しています。

春は今回初めての試みとして、新聞社との共同企画の展覧会を開催します。今年創刊一二〇年を迎えた北國新聞社と「国宝薬師寺展金沢開催委員会」を組織して行う、「**国宝 薬師寺展**」です。日本海側では初めての開催となる本展は、所蔵者である薬師寺の特



聖観世音菩薩立像 ©飛鳥園

別なご配慮をいただきました。寺内での公開を一部控えることで、金沢での五十九日間という長期の展示が可能になり、奈良国立博物館の学術協力もあって、国宝六件を含む四十四点からなる展覧会となりました。「古都奈良の文化財」の一つとして、世界遺産にも登録される薬師寺の白鳳・奈良時代から伝わる数々の文化財を通じて、古代仏教文化の清華をご堪能いただく格好の機会となることでしょう。

秋は、金沢宗達会創立百年の記念とあわせて「**俵屋宗達と琳派**」を開催します。日本の美意識の集大成として、内外に広く

愛好されている琳派を、俵屋宗達による造形活動の展開と、俵屋宗雪、喜多川相説による継承、そして尾形光琳による深化の視点に、今回新たな考察を加えてご覧いただくものです。国宝「蓮池水禽図」のほか、醍醐寺所蔵の重要文化財「舞楽図」など約五十点をご覧ください。



重文 舞楽図 俵屋宗達 醍醐寺蔵

新春一月には「石川県立美術館名作の森」を開催します。昭和三十四年、野々村

仁清の国宝「色絵雑香炉」を収蔵品の第一号として石川県美術館がオープンしました。昭和五十八年には石川県立美術館という名称に改め、現在地に再スタートしました。そしてここまで収蔵してきた作品は、三千点を超えるまでになり、雑香炉以外にも重要文化財は六点を数えます。石川ゆかりの作家の作品収集に努めてきましたが、漆芸の松田権六、油彩画の宮本三郎・高

光一なども代表する作家の作品も数多く所蔵しています。



蓬萊之棚 松田権六

本展では、所蔵品のほかに寄託を受けている作品も加えて、開館より三十年、旧館より数えて五十年を経た石川ならではの歩みをご覧ください。

特別陳列は、前田育徳会尊經閣文庫分館で「**尊經閣文庫名品展―国宝水左記を中心―**」を行います。平安時代の公卿、左大臣源俊房の自筆の日記である『水左記』をはじめ、公家や武家の日記や古記録を紹介いたします。秋には「**加賀藩の美術工芸**」も開催します。

近現代美術では、金沢美大を卒業して王立ゲント美術大学でフランドル技法を学んだ能島芳史による「**能島芳史展―15世紀フランドル絵画からの展開―**」、工芸では「**生涯百年 截金人間国宝・西出大三―平安の美を求めて―**」を予定しています。金銀箔による華麗な装飾、端正で美しい造形の作品で知られる西出大三の回顧展です。



風蝕・南瓜 能島芳史

こうした展覧会に加え、当館が主催に加わる北陸中日新聞主催「**エミール・クラウスとベルギーの印象派展**」をはじめ二十六の企画展が予定されています。

今年も、石川県立美術館の展覧会に足をお運びくださいますようお願いいたします。

平成24年度の コレクション展示室を 振り返って



長谷川等伯とその周辺

コレクション展示室では、月ごとにテーマを設けて所蔵品や寄託品を公開したほか、特別陳列や特集展示を行いました。前田育徳会尊經閣文庫分館では、特別陳列として九月に「尊經閣文庫名品展―職人歌合の世界―」を開催しました。「職人歌合」には画中詞として職人たちの会話や口上が記されており、当時の職人の様子を知る上で貴重な資料ともなっています。前田育徳会が所蔵する二種類の『七十一番歌合』と『鶴岡放生会職人歌合』の全貌公開は、初めてとなるものでした。十月には「加賀藩の美術工芸」を行いました。加賀藩では三代から五代藩主の時代に、名品の収集とあわせて美術工芸を育成する総合的な文化政策を推進しました。その象徴ともいえる「百工比照」をはじめ、優れた文物や美術工芸品を展示しました。

第2展示室では六月に「長谷川等伯とその周辺」を行いました。等伯が信春と名乗り、能登を拠点に活動していたころの優品のほか、四男左近や長谷川派とされる作品も交えての展示でした。近現代美術では、十月から十一月にかけて「能登の彫刻家たち」（第4展示室）、「生誕100年記念 寺井直次の漆の美」（第5展示室）という二つの特別陳列を同時に開催しました。前者は拠点もしくは出身という能登ゆかりの作家を取りあげたもので、物語者を含め二十作家、二十八点を紹介しました。石・木・塑像・金属など多彩な材質による彩り豊かな展示で、作家の個性が反映され、能登の彫刻家の存在感を伝える内容となりました。一方、蒔絵の重要無形文化財保持者として知られる寺井直次氏の特別陳列は、生誕百年を記念するものでした。初期から晩年にいたる漆芸作品に、スケッチや下絵を加えて、寺井氏の創作活動を回顧する展示でした。



能登の彫刻家たち

近現代美術の特集展示は、あわせて十回開催しました。第3展示室では、画材や愛用の品とともにこれまで未発表の資料も交えて「知られざる鴨居玲」、水門や発電所など風景を描く「新保甚平展」、本年没後十五年を迎えた二人の洋画家「竹沢基展」「田辺栄次郎展」を行いました。第4展示室では「没後五十年吉田三郎展」、「石川の近代彫刻をふりかえって」と二つの彫刻の展示でした。第5展示室では「染める絵画」と題して成竹登茂男と堀友三郎という二人の染色家を紹介し、新春に「明治の工芸」を行いました。第6展示室では「今様絵合」と題した展示で、複数の日本画を同時に比べながら鑑賞することで、一点ずつでは見えなかった視点や新たな感覚を味わうことを企図したものでした。



生誕100年 寺井直次の漆の美

「須田国太郎の作風解釈」

講師：原田平作氏（大阪大学名誉教授）

平成24年9月2日 午後1時30分～ 会場：美術館ホール



昭和三十六年十二月に須田国太郎先生が亡くなられて、翌年展覧会を開くことになり、準備のために増員があつて、私は京都市美術館に勤めることになりました。展覧会は三十八年一月から京都市美術館、続いて二月から三月に東京の国立近代美術館で開かれました。その後も何度か須田展に関わり、今回の没後五十年展にもご遺族から展覧会のお話をいただき、各美術館にお声をかけた次第です。

資料に『須田国太郎（一八九一～一九六二）の東洋的水墨画的精神とその展開』という文章がありますが、これは山口県立美術館で昭和六十年に開催した「小林和作・須田国太郎」展に際して書いたものです。この冒頭に「ハイカラな山高帽をかぶった室町時代の古武士」と須田先生（以下敬称略）を評しました。スペインへ行つてから一年目くらいの写真に、帽子をかぶつたのがあつて、非常に背が高くてかくしゃくとしてよく似合っているんですね。そして後年

水墨を描いたこと、能が好きで謡曲の修行を続けたことなどから評した次第です。

須田は大正八年から十二年まで四年間スペインのマドリッドに留学して、スペイン美術を勉強しましたが、何度もパリやイタリア、ドイツに行き、ヨーロッパの状況を見て回りました。フランス中心にヨーロッパ美術を考えがちになりますが、ちょっと離れたところから全体を俯瞰しているわけです。須田はスペイン美術史に非常に詳しく、美術史家としても活躍しました。

マドリッドではティツィアーノやティントレットやゴヤなどを原寸大で模写しています。いろんな要素をどう配置するか、油絵の色とは何か、油絵は透明であるべきで、塗り重ねていくべきもの、下地を描いてその上に透明な油絵を塗って重層的に描いていくのが筋道だ、ということなどを模写を通じて学びました。そしてセザンヌからは、モデュラシオン（階調）を学んでいます。

帰国してからはだんだん影絵のような作品になっていきます。イメージを重視するんです。中心になるものを何にするか。それが最初に現れたのが昭和五年の「発掘」です。帝展に応募したのですが、落選しています。

昭和七年、四十一歳の時に最初の個展を開きまして、「法観寺の塔婆」などを発表しています。外隈という日本画の技法を使って、つまり中が白く外隈でもって形を

整理して描いて、非常に存在感のある作品です。

戦後になると色が明るくなります。「犬」では屋並みの色に、緑色が加わっていますし、「鶴」では鶴が並んでリズムカルで後ろに屋並みが明るく見えます。それぞれが独自の階調（モデュラシオン）を持つて描かれています。正面から描くというのも特色で、動きが鈍くなるけどもなんとか動きを生き生きとしようとしている。またモノのように、同じ場所を時間を変えても描いています。

最後の頃になるとガウディとその建築をイメージして、もう一度スペインへ行つてみたいという思いを込めた「ある建築家の肖像」など抽象に走つていったような作品が描かれます。

須田は安井曾太郎や梅原龍三郎と同世代で、また坂本繁二郎を含めて、作品には日本の古美術を連想させるものがあります。梅原には桃山の絢爛豪華、安井には文人画、坂本は能、そして須田には水墨画。自国の文化に少しでも連なり、伝統をわきまえつつ自分を出すという思いが感じられるのです。

（平成二十四年九月二日の講演会要旨を当館の文責でまとめたものです。当日は須田作品、日本、フランス、スペインの絵画など、二百枚を超える作品画像を映写し、須田の作風展開について講演いただきました。）

村田省蔵展—画業60年の歩み—

平成25年1月4日(金)～2月11日(月・祝)

企画展として現在活躍されている画家の大規模な展覧会を開催するのは、昭和五十九年の高光一也展、平成十五年の脇田和展以来のことでした。美術館が新館となったのが昭和五十八年ですから、三十年間で三人目になります。この数が多いか少ないかを問われれば、厳選された数と答えたいと思います。なんといっても企画展示室三室を九十点前後の作品で埋め、しかも充足した時間をご来場の方々に提供できる作家はそうそういらいっしょいません。

今回の村田省蔵展、学生時代の人物画から上京して風景画に移る頃は無論ですが、その後も節目節目に作風やテーマが異なり、一点一点を鑑賞しつつ、いつの間にか稲架木が立ち並ぶ近作にたどり着いたという方が多かったのではないのでしょうか。その稲架木も雪中に林立するストイックな世界から、農家との調和を見せる穏やかな世界、そして、季節が春へと移り、芽吹き頃、若葉が繁った稲架木へと移っていく、風景画がこれほど多彩なジャンルであったかと改めて感じた次第でした。

週末ごとに雪の日が多かったのが残念でしたが、そうした天候にも関わらず、会期中の前半と後半、村田先生ご夫妻が、ご来館いただいた旧知の方やファンの方、関係者の方など大勢の方々と歓談される姿を拝見いたしました。皆さん展覧会を喜んでいらつしやる様子、この点が物故作家の回顧展とは違い、直截に伝わってきます。あつという間に三十九日間の会期が過ぎていったという気がいたしました。



平成二十五年度 美術館バスツアー(予告)

今年度春のバスツアーは、五月下旬に滋賀県長浜市を訪れる予定です。

向源寺「十一面観音立像」、神照寺「金銀鍍透彫華籠」、竹生島宝厳寺「唐門」、竹生島都久夫須麻神社「本殿」といった湖北地方の国宝四件を中心に見学します。

バスツアー初となるフェリーでの行程を含め、皆さまに湖北地方と琵琶湖にまつわる文化財を見て感じていただきたいと思っております。

日時などの詳しい内容、募集要項については次号の美術館だよりにてご案内いたします。

四月の行事予定

■百万石まちなかめぐり さくら2013 美術館イベント ビデオ上映会 午後1時30分～午後4時 美術館ホール 入場無料
7日(日) 「国宝」シリーズから、東大寺、興福寺、当麻寺、薬師寺、唐招提寺の五本を連続上映します。

次回の展覧会

前田育徳会 尊經閣文庫分館	加賀百万石大名—武の装い—
第3～4展示室	祈りの造形—絵画・彫刻—
第5展示室	石川の工藝I
第6展示室	古美術優品展—加賀百万石の至宝—
第2展示室	国宝 薬師寺展
企画展示室	会期：4月26日(金)～6月23日(日)
会期：4月21日(日)～6月23日(日)	

久隅守景 くすみもりかげ 石川県指定文化財 江戸17世紀 縦155.5cm 横359.4cm



「田園画家」との異名をとるように、久隅守景は数多くの「四季耕作図」を描いています。平成二十一年に当館で開催した「久隅守景展」では、本作と重要文化財二点(そのうち一点は当館所蔵、本号表紙に部分を掲載)を含む八点の「四季耕作図」を一堂に展示し、大きな話題となりました。そして守景による一連の「四季耕作図」には、中国からもたらされたこの画題に対する様々な創意がこめられていることを確認することができました。

まず大きな流れとして、守景は中国の画題を和様化することに意欲的に取り組んだことが挙げられます。狩野探幽門下の傑出した画家として、当時から高く評価されていた守景の画技をもってすれば、日本風俗の「四季耕作図」は簡単に描けそうなものですが、守景は構図や遠景となる山水の描き方から徐々に和様化を進めています。この点に、容易に人の求めに応じなかつたと伝えられる守景の性格を垣間見ることができま

す。本作は、守景が中国風俗で描いた「四季耕作図」の最終段階に位置付けることができます。和様化された山水のフレームに人物が絶妙のバランスで配置され、伝統的な農作業の描写に家族の団欒の様子を加えるなど、随所に詩情を感じさせます。

※第2展示室 特集「長谷川等伯と久隅守景」で三月二十八日から四月十六日まで展示。

ご利用案内

コレクション展観覧料
 一般 350円 (280円)
 大学生 280円 (220円)
 高校生以下 無料
 ※()は団体料金
 毎月第1月曜日はコレクション展示室無料の日(4月は1日)
 4月の開館時間
 午前9:30～午後6:00
 カフェ営業時間
 午前10:00～午後7:00

4月の休館日は
 17日(水)～20日(土)

ミュージアムショップ

通信

木々の芽の膨らみが、目にうれしい頃となりました。春の訪れに合わせて、テーブルウェアの装いも新たにしてみませんか。

今回紹介するのは、古九谷風小皿です。直径一〇cmの小皿ですが、古九谷の風合いを素敵に再現しています。当館の所蔵品をモデルにした商品も含め、全二十種類。図柄は海老や鳳凰などの吉祥文が使用されているため、贈答にもお手軽です。全種類注文される県外からのお客様も多くいらっしゃいます。どうぞ手にとってご覧ください。



古九谷風小皿 一枚840円



もりのみやこ少年少女合唱団 イラスト: (株) PA.WORKS



明治10年8月、
 加賀藩 前田家の出資により創業。

北陸銀行

金沢支店 / 〒920-8686
 金沢市南町5-28 TEL.076-263-5131

広告

石川県立美術館だより
 第354号(毎月発行)
 2013年4月1日発行
 〒920-0963
 金沢市出羽町2番1号
 Tel:076(231)7580
 Fax:076(224)9550
 URL <http://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>